

教育課程編成委員会 第2回議事録

日時：2018年10月10日(水) 18時30分～20時00分

場所：東京YMCA医療福祉専門学校15教室

出席者： 三沢 幸史氏 望月 太敦氏 小檜山 修平氏
八尾 勝 倉持 有希子 中浦 俊一郎

列席者： 品川 智則 加藤 和貴 品川 智則 村上 剛 林 恵子

欠席者： 白井 幸久氏

I. 聖書日課 YMCADeイリーメッセージ 村上

II. 議事

1. 校長挨拶

本日午前中に「高等教育の負担軽減策」についての説明会に出席し文科省の職員の話聞いてきた。親の収入に影響を受けることなく低所得の家庭の子どもでも高等教育を受ける機会を与えることがこの制度の目的である。対象となった生徒は学費の内の授業料は減免、その他はJASSOの給付型奨学金が支給され実質無償になる。ただし生徒は家庭の経済的な条件以外に、進学後に一定の成績条件を満たさないと給付が打ち切りとなる。一方、無償化の受け入れ対象校となるには職業実践教育を行い実務家を育てていることが求められる。また理事の内複数人を外部理事(業界人)とする要件もある。理事会が存在しない学校は学校関係者評価委員会や教育課程編成委員会を設置するよう文科省から指針が出ている。学校関係者評価委員会や教育課程編成委員会に期待される事がさらに大きくなったと言える。

2. 各部会のディスカッション

白井委員が欠席のため、八尾校長が議長代行することを提案。全員一致で決定。前回8月21日の記録に基づき、介護福祉科と作業療法学科に分かれ、それぞれで話し合いを行った。

3. 部会報告(それぞれの部会の詳細な記録は別紙に記載)

1) 介護福祉科(倉持学科長)

今年度は「つながり隊」と称する組織を中心にボランティア活動に力を入れている。これは昨年度いただいた委員の意見を実現したものである。留学生が入学してくる中、今後「つながり隊」をもっと広げ、いろいろな場面に活かしていきたいと考えている。そのためには組織としてしっかり機能するようになる必要がある。今後は、一部の学生だけではなく、多くの学生に参加してもらえ「つながり隊」を目指したいと考えている。

<ご意見>

- ① 望月委員：「つながり隊」の活動の中で学んだ経験が卒業後も活かされることを期待する。また卒業生が「つながり隊」に戻ってきて新しい何かを作っていくことができたなら素晴らしいと思う。「つながり隊」を拠点に色々地域に展開させていけると良いと思う。
- ② 中浦学科長：作業療法学科の学生も今後は「つながり隊」に参加したいと考えている。学内では多様な人々と話ができる機会が少ない中、各種のボランティアや「つながり隊」を通して、様々な人と出会い、話してもらいたい。その経験が卒業後に現場で有意義に活かされると考える。

2) 作業療法学科（中浦学科長）

カリキュラムマップを作成し、学生に学習の目標を分かり易くすることで、学生がより主体的に学習に関われるようになることを期待している。学年毎に学年末の時点でのゴールを明確に設定した。

また、従来示していた「求める学生像」とディプロマポリシーの間に距離があり、学生に分かりづらいものとなっているため、学生には作業療法士としてスタートする時点での学生像がどのようなものであるのかをしっかりと伝えていきたい。委員からもこの一連の作業に期待の声を頂いた。

2020年のカリキュラム変更（現在大枠が決まり、先日厚労省よりPTOT養成施設指導ガイドラインが送付されてきている）の中で、特に「臨床実習」について情報共有を行った。今後は診療参加型（CCS：直接患者さんへの治療に関わるのではなくOTの背中を見ながら学んでいこうという方法）になって行く予定である。また多職種連携の中において「他者理解」や「合意形成」の理解も大切になってくるため、これまで以上にこれらに関して授業に組み込んでゆきたい。委員からはメンタルヘルスの授業も必要なのではないかというご意見を頂いた。

4. その他

八尾校長より今後の主な行事（12/20 クリスマス礼拝、2/22 介護福祉科卒業研究発表会、3/12 卒業式、4/5 入学式）について別紙「2018年度主要学事暦（後半）」に基づき委員にお伝えした。

また、現委員の皆様には引き続き2019年度もお引き受けいただきたい旨をお伝えし、今年度の教育課程編成委員会は今回をもって終了となった。

記録 林 恵子

2018年度 第2回教育課程編成委員会・部会（介護福祉科部会）記録

出席者：望月太敦氏 倉持有希子 品川智則

欠席者：白井幸久

進行：倉持有希子

記録：品川智則

1. 倉持学科長から

- ・ 現在の取り組みなどに関する報告

国試対策、ボランティア活動（つながり隊に）について意見をもらい、これらの取り組みは重要な取り組みとして今後も組織的に実施していけるように現在も取り組んでいる。

今後は特に学生の状況に変化がある中で、継続していくための取り組みについては改めて考えていかなければならない。例えば外国人留学生を含めてどのようになじんでもらいボランティア活動を実施していけるかなどである。つながり隊などの学校が行っているボランティア活動に関する理解につなげるために、学科の授業の中で異文化理解などの授業を実施し、学生同士の理解を深め、様々な価値観に触れる機会をもつことも考えており、それをつながり隊や学校が考えるボランティア活動に対する理解などにつなげていきたい。

現在のつながり隊の活動としては、定期的に参加するものとして「ひらや照らす」で実施している認知症カフェには継続して参加していくそれ以外にも、市の社会福祉協議会とのつながりをもつことなども継続していくこととする。

つながり隊の目標は、アクティブ福祉 in 東京で発表をすること。現在実施している内容をやりっぱなしにしないせずに活動内容を整理、振り返りながら次に次につなげていくことが必要である。

2. 望月委員から

つながり隊の取り組みがそのような発表までいけたらとても素晴らしいことになる。やりっぱなしにしないことが大切である。「学生のときはそのようなことを行ったんだ」で終わらせないようにしなければならない。就職した場にそのような場がなかったら自分たちで作っていくぐらいの力につなげるようにボランティア活動の意味を考えることなどを考える機会も同時にもっていけるようにすることが大切。

また、今後の地域つながり隊では、卒業生とのつながりも持てるようになると良いのではないかな。地域つながり隊であった卒業生に「いつでも来ていいよ」ということを発信し続け、卒業してもつながり隊として活動していけることができれば素晴らしいのではないかな。そのことは、卒業生が自分の働いている場における地域活動などのエネルギーになるのではないかな。また、卒業をして、現場の仕事などで悩んだりしたときにも、このような機会があると、新たなモチベーションをもてる機会になるのではないかな。

2018年度 第2回教育課程編成委員会・部会（作業療法学科部会）記録

出席者：三沢幸史氏 小檜山修平氏 中浦俊一郎 村上剛 加藤和貴

進行：中浦俊一郎

記録：加藤和貴

本日の意見交換のテーマについて

中浦学科長から、前回の会議を受けての本日の意見交換のテーマについて説明がなされた。その後、意見交換がなされた。

1) カリキュラムマップについて

前回、カリキュラムマップについて話が出ていた。2020年度にむけ現在カリキュラム変更作業をしているので助言いただければ幸いである。ディプロマポリシー（＝求める学生像「対象者の力になりたいという思いをもつ」「自分で考えられる」「コミュニケーションがとれる」「社会人としての態度がとれる」）にあわせ、各学年のアウトカムの目安として1年「基礎」2年「専門」3年「応用」と位置付けている。1年は学生が多様な学習経験背景をもっている中で態度面からやらねばということで、能動的に行動できる学生を目指している。それに加え OT のイメージが持ち覚悟を持ってほしいと考えている。2年は他者の意見も踏まえ表現する力。基礎から専門性へつなぐことができるような方向で考えている。3年はそういった経験から他者と意見を共有したり、個人で技術を磨きつないでいく。対象者の状態を捉え柔軟にとらえていく。診療参加型ということで様々な方とお会いし、より臨床に近い形で柔軟にとらえていきたい。

小檜山委員：具体的にどういった行動で学生に接したいなどあるのか。

中浦学科長：学生像の共有から始めたいと考えている。積極性、探索できる、など個人レベルで意識している。

小檜山委員：能力差もあるため理解力も様々であるため、難しい面もあるのではないかと。確かに成功体験がないと難しい。

中浦学科長：できない学生に対しては「分かった」という経験がないと前には進めない。

三沢委員：ディプロマは変な言い方だと「よくある考え」ともいえるが、でも素晴らしいとも言える。人間性も大切だが作業療法士として目の前の対象者やチームがあるとして、作業療法士としてどう貢献するか。作業療法観をどうつけるか。臨床では社会人としての態度が必要だが、それ以外では最低限の振る舞いでも良いとも言える。作業療法としての視点を学生に提示し、「作業療法士」として求められるものをつなげて欲しい。

中浦学科長：求める学生像は以前の学科内の会議で決まった。スタートとして入れてもいいのではないかと考えている。

小檜山委員：OTとしてどうしていくのか。お店に買い物に行くことで例えると、OTの店があるとなれば、細かな知識は個々の商品とも言える。そういった目的意識を持ったうえで、普段の授業に臨んではどうか。病院で働いていた時、いきなりリハビリテーション室に連れてくるのではなく、病棟に

出向き話を聞いたりしていた。学生も車いすを押すなどする関わりからやってはどうか。

小檜山委員：ポスター貼るなどはどうか。OTの素晴らしさを常に伝える。具体的な事例も伝えていってもよいのではないか。

2) カリキュラム変更について

中浦学科長：理解を待つと時間が無くなってしまうという側面もある。2020年からカリキュラム変更で3150時間となる。4年生も視野に入れていると思われる。時間数が増えることで学生も疲弊するのが予測される。それに対してご意見を頂きたい。

三沢委員：2年後、臨床実習もCCSが基本になり、MTDLPが基本になる。その人がやりたいことを実現するためにどういう風に環境や手段を評価していくか。その人の目標を達成することをどうするか。それぞれの経験をそれぞれの教科の中に入れることができるかもしれない。考え方として体験的にも入れていくと良いのではないか。授業の中に取り入れていく。たとえばグループで何かをやる、目標を合意して決めていくということは、臨床のアプローチと変わらない。そういった体験をすることで、合意した目標を大切にしていけるのではないか。

中浦学科長：それぞれの授業でやっていたことを共有し、他者理解が必要、合意形成につなげるようにしていきたい。実習での対象者とのかかわりにも影響する。

三沢委員：いろんな目標を立てるために いろいろなツールを使用する。目標に向かうためにどういったことをすればいいか考えることがほぼ作業療法になる。

中浦学科長：体系化していくためにはフィードバックしていく必要がある。今後は診療参加型という呼称から OT 参加型という呼称になっていくという。率先してやられている養成校や臨床の現場から講師として呼びし、今度のSV会議でも講演をしてもらう予定である。また、地域化・他職種連携などは増やしていく予定である。他者理解ということでコミュニケーション理論も入れていく予定である。

加藤氏：昨今の学生の状況を踏まえると、メンタルヘルスの授業を取り入れることも不可欠ではないかと思うがご意見を頂きたい。

三沢委員：職場ではメンタルヘルスチェックをしている。そうすると問題を抱えている人が出てくる。毎年数人はいる。退職になることもある。そのため何らかの対策は必要ではないか。病気の診断がつく人は環境因だけでなく個人因子家族因子なども関係している。

中浦学科長：このようなことを含めて今後のカリキュラム変更をしていきたい。ご意見を頂いたように作業療法としてのカラーを打ち出していきたい。臨床実習も合意手段、達成手段などをしみこませていくと良いかと思う。またメンタルヘルスについても考慮していきたい。

以上